



糸田耕集

15
1544
3



門 45
號 1544
巻 3

田耕羊巻之三

物之部



○五月癸丑某七月廿二日栢津高柳の道色農家の男児
後六某とて鳥と追て疎中ふゆとゆと道ろり川の水空
流るるびいふせんといふりたるる言たせまりてぬいふと
おとれびん今げもなり童人は^{サケ}叫び那ぶらぶらやうといふ
と答てやまへりて流りびんあて流るるもいふも圓来
にる際をほくろぶとていれびんといふとていふも馬も
走ふといふといふもいふも童もはく徳もあてはひはぬとて
我やぶらりなりなりいふといふといふもいふもいふもいふも
それいふらりいふらふといふらりていふらりいふらりし
うたふといふらりていふらりいふらりいふらりいふらりいふらり
いふらりいふらりいふらりいふらりいふらりいふらり

刊田耕羊三

且つ其の爲りたるが如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事
 同。其の如く衆僧勸修の付くは公揚一が是の二月廿五日
 但樂像の如くして向ひておぼえたり。ならん世に生かすべしと云
 ○見よ尚書に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 勝る。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 備の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 ころ。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 には。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 たら。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 られ。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云

○此の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云

乃と云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 つ。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 され。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 ころ。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 且つ。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 乃。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 活。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 て。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 ○。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 年。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云
 と。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云ふ事。其の如くわが身も亦今世に生かすべしと云

わんせう一帯におおすまはるんはまもせしとちもさうびんうこの
とけいしゆいのなふ團いひまよりやへのあせり

○政會平歎國不肅のたれ穢異帯雷本も亦同一端祥と
動が思この善とじつともも基也一人の眼別たのよとと
いのおひの崖に轍してままわりのまごうあまゆひさまは
鷲とりよの標つんに野は紅冠と裁ぶ身うの又練と備入る東
時と被下りくくも涼谷海崎乃遠かりとまいつんもと
りてお百令とも惜まざらんときらつるおふあもさぐ異國の人
の日の食料ふさく亮りり入猫とりよのたたきふくたを
アタラも虎の標してふよくの別安くと徳かく角と授
くといふはまゝく群せんあつたさる常あつたのいこも丁に呉
たれはもとさうしてやぶけは平比本乃實れと異なりと責

て世人をさるるたのいこちやいりた年たつとがかりとも梅
標いこちと事たのいりまふたごころのやとふおんふと
めいこうたつらん又常めいさのいこ光れ標たていひて歌さ
と標はあまもともむれとととまりひさるも相のいり
多とさうたつらりやうは朝のたれあひりりたてらととま
おのれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
いりおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
まもいりおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
乃ぬいり射るおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
の小徑おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
○おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

物なるもの之原なるも音もして其の内と其のまじりしは
 乃唐莫かるともつらばりし時ハ竹葉の青と人車と空
 かんともまじりしとまじりしはまじりしはまじりし
 ありしとまじりしとまじりしとまじりしとまじりし
 たりしとまじりしとまじりしとまじりしとまじりし
 中へくまじりしとまじりしとまじりしとまじりしと
 病のなりてそまじりしとまじりしとまじりしとまじりし
 ○わたりしとまじりしとまじりしとまじりしとまじりし
 歌天竺寺乃林に群鳥と都下ハ人々亦群衆して人々
 みまの緒をた出さず射入の回を考ふるも思はるる
 日本紀天竺天皇七の猶よも歳天自西南至東如くあり
 和名おに鮮色立成云暗嘴鳥阿止里加菴漢語抄云猶



新言

登道は雨らきりなきしやうにけりてはかきつらなる月
中夜老のきつとくしりてはかきつらなる月
ありてはかきつらなる月
人合のほかにてはかきつらなる月
十夜中夜はかきつらなる月
孝院とてはかきつらなる月
さしとてはかきつらなる月
みのりてはかきつらなる月
かたはかきつらなる月
しとてはかきつらなる月
教しとてはかきつらなる月
後夜団圓はかきつらなる月

寶之石團一鳥一鳥有聲人有心聲心雲水俱不也玉律正
視云此詩と梅村載ありしもの得して性靈集中此詩を
ゆきとてはかきつらなる月
原野光のきつとくしりてはかきつらなる月
み念はありてはかきつらなる月
とてはかきつらなる月
ありとてはかきつらなる月
作のほかにてはかきつらなる月
くはかきつらなる月
きつとてはかきつらなる月
早花とてはかきつらなる月
中夜とてはかきつらなる月

其葉のたぎらるるべし

○戴叔倫が盧橘花開楓葉衰の詩の三作のそとに
に廣州記云盧橘皮厚氣色大如柑酢夏熟土人呼為壺
橘又增註盧橘即枇杷也又正字通橘條云曰壺
金橘盧橘也蘇軾誤以盧橘為枇杷陶九成疑之以廣州
之壺橘為盧橘と有り白香山の律詩亦盧橘實低山雨重
稼桐葉戰水風涼と有り對句として壺橘も夏熟と有り
壺橘不承者流して壺橘乃枇杷也と有り流例して花は
壺橘の葉のたぎらるるべしと有り院務記百首并枇杷
と有り夏熟の統より有り又水滸百首枇杷と有り花は壺橘
と有り壺橘の統より有り又水滸百首枇杷と有り花は壺橘
と有り壺橘の統より有り又水滸百首枇杷と有り花は壺橘

花は壺橘の統より有り又水滸百首枇杷と有り花は壺橘
○近江蒲村郡奥山あり毎年夏に熟する年倍
りよの一奇也延喜大略職式曰諸國貢近江園二園
條ト云るものなり且門道松の日記記事に現あり曰今考
所獻之物通草之實而其氣味形色與郁核子大異
也按土人以此獻物不稱名專謂御貢與郁核
倭語相近故誤稱通草而謂字倍者乎以枯柴造小
籠盛其體存朴古按以枯柴造小籠一語也其圖左に出中人此其行及の考と論
すといふ曰按順和名抄云郁子和名年閉今視近江
園所獻之物乃野木凡實也和名止幾彼阿計比又
名年倍凡貢物和引皆稱年倍即於仁倍之轉語也
此物近江自昔有故為貢物來故稱之年倍特不此

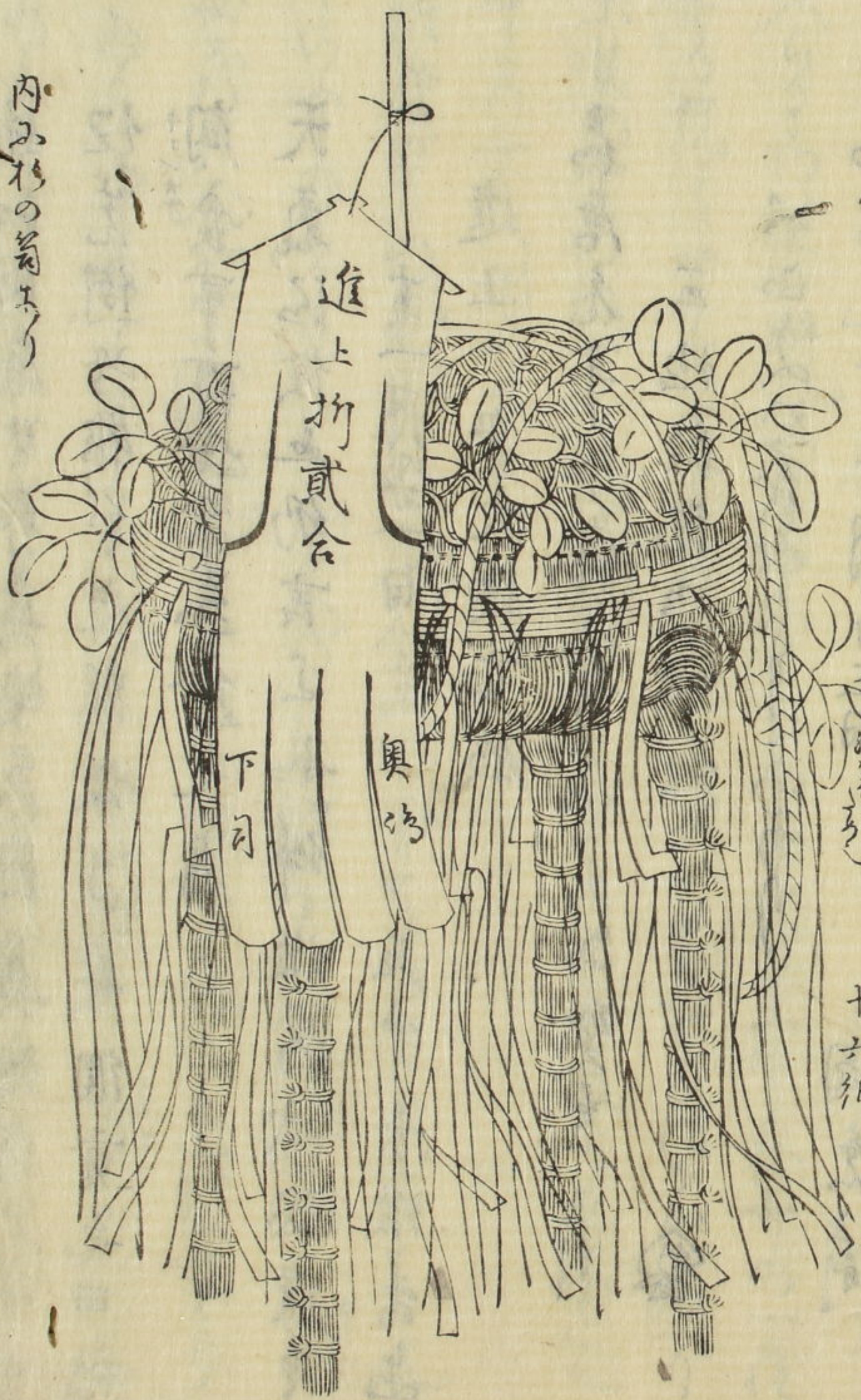
物名之、貢物之惣稱也。願儀、以郁子、當年倍取云願乃
 式ふてえりて、蓋野、木凡通牋、形狀相類、故道徳以之爲
 通草、子亦、器也。道徳流る、固、田子、曰、これ、奥、高、の、月、玉、之
 影、らし、よ、ま、生、成、り、て、あ、ら、ま、の、高、王、の、世、所、り、て、呪、さ、せ、給、ひ、時
 まで、何、れ、ら、に、平、王、親、し、ら、し、り、ら、る、り、高、王、と、誤、乃、ら、ぬ、お、れ、ハ、づ
 是、も、高、王、の、御、前、に、し、ま、さ、の、の、よ、り、し、め、し、今、も、是、を、後
 じ、り、年、倍、取、り、し、除、地、ま、さ、る、り、井、川、用、に、充、ら、る、人、ま、植、中、人
 け、あ、り、時、の、御、前、に、取、り、し、ま、さ、る、り、高、王、の、御、前、に、取、り、し、ま、さ、る、り、
 祝、奏、り、高、王、と、誤、乃、ら、ぬ、お、れ、ハ、づ、此、高、王、の、御、前、に、取、り、し、ま、さ、る、り、
 又、此、高、王、と、誤、乃、ら、ぬ、お、れ、ハ、づ、此、高、王、の、御、前、に、取、り、し、ま、さ、る、り、
 あ、ら、ま、の、高、王、と、誤、乃、ら、ぬ、お、れ、ハ、づ、此、高、王、の、御、前、に、取、り、し、ま、さ、る、り、
 是、高、王、と、誤、乃、ら、ぬ、お、れ、ハ、づ、此、高、王、の、御、前、に、取、り、し、ま、さ、る、り、

郁子、糸

葉數三四五

四手惣八

十六紙



内ふ杉の翁より
 翁の内、櫛葉と糸
 も中に郁子と置

四脚葉少、作、後、月、十二
 足、同、月、あ、る、年、ハ、十三

又彼奥の修其せる所は又書をよみ人あり候て
迦に因蒲生郡奥嶋庄内真徳佛人等申
但先例此非分之課役可専調貢之由被
聞食事可令个給之旨
天氣候也仍言上如件後秀誠恐後々

十一月廿一日

左中兵衛秀忠

進上 甲大納言殿

嘉暦元年十月八日

加賀守 五判

三位経記坊



此山入の義々りものとあり

嘉暦元年十月十三日

園意五判

新所正判 奥嶋庄下司殿

○またこれ抄系もいふごとくやかねがふねの系は信守と
と云々と六帖よくもいふねがね徳りともまゝにて新なる集
も入らるは其の解じつゝもふり新なる集中秘奇の二種
と云ふ説も中へ道徳院殿も抄のころと日記にけねり
万葉集のやかねがねは其のてふとあつたやかねがねと
集中乃奇に例あるあり

○薩摩の鬼界好屋久志元了等の内ふはるるに
本よりいふのいふとて久持よりゆるり津國難言氏
ふ秘典にむい紫辨黄葉実の橋袖衣のんもはむり
あるぬえやわのいふとて久持よりゆるり津國難言氏
いふのいふとてふとて久持よりゆるり津國難言氏
いふのいふとてふとて久持よりゆるり津國難言氏

ちぢしきるより今不承はるが巻の
 文庫に納りきふとありたりとんけんりつ
 せるなりりねざる法つけりやうめい
 もひしきまほくてもまきうなるう
 飯高の骨松乃十節虎こせし
 にそらゆじと申れ大節づいさ
 極りし事なりと申れ極りあふ
 ていしけね乃光をさつし
 るし

鎌倉和田盆圖

巨り四寸九分
 深六分半
 裏上底巨り一寸五分
 深六分
 熱風沫をありせ
 みく本理とせ
 樽外に金泥を
 垂文の盆圖



○ 赤坂の小屋の地蔵と名くもくわの薩摩にのせき併
やうけの飯茶を度き一斗余り小猪は一盃をいほりて試
ころ尾作の注しつや人のままの毒しつるひの毒に清くとん
るまのい飯茶の注とちよも何れもこら新よまわてあしや
むに人のまをい注し流し原るも何れも

○ 赤坂の小屋の地蔵と名くもくわの薩摩にのせき併
やうけの飯茶を度き一斗余り小猪は一盃をいほりて試
ころ尾作の注しつや人のままの毒しつるひの毒に清くとん
るまのい飯茶の注とちよも何れもこら新よまわてあしや
むに人のまをい注し流し原るも何れも

○ 赤坂の小屋の地蔵と名くもくわの薩摩にのせき併
やうけの飯茶を度き一斗余り小猪は一盃をいほりて試
ころ尾作の注しつや人のままの毒しつるひの毒に清くとん
るまのい飯茶の注とちよも何れもこら新よまわてあしや
むに人のまをい注し流し原るも何れも

Handwritten text in Arabic script, likely a manuscript or a page from a book. The text is arranged in approximately 12 horizontal lines, starting from the right side of the page and moving towards the left. The script is cursive and appears to be a form of Arabic or Persian. The first line begins with a large, decorative initial letter. The text is somewhat faded and difficult to read precisely, but it seems to contain a continuous passage of text. There are some small markings and a faint signature or mark at the bottom right of the page.

岡田耕平卷之三終

